

松下幸之助記念財団 研究助成

研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】

北 夏子

【所属】(助成決定時)

筑波大学大学院 人文社会科学部 哲学・思想専攻 哲学分野

【研究題目】

ベルクソンにおける「因果性」の概念と 19 世紀におけるイギリス思想のフランス思想への影響について

【研究の目的】(400 字程度)

アンリ・ベルクソンがハーバート・スペンサーからどのような影響を受けているかを明らかにすることは、ベルクソンの思想を読み解くためには不可欠である。スペンサーの思想に対比して考えられているのは、特に「時間」についての認識の在り方である。しかも、この認識の在り方は「因果性」と関わりがある。ここにベルクソンの思想の独自性があるのではないかと考え、本研究の目的を、ベルクソンの「時間」を、「因果性」との関係において明らかにすることに置いた。この目的を達成するためには次の事柄を明らかにする必要があった。①ベルクソンの進化論の独自性、②スペンサーの「力」概念と、運動法則とエネルギー保存則との関係、③ベルクソンの「時間」概念と、「力」と「因果性」の概念との関係。

【研究の内容・方法】(800 字程度)

研究の内容 本研究では、「力学の究極諸観念」についてスペンサーは理解が十分ではなかったというベルクソンの指摘が、スペンサーの思想のどの箇所についての妥当な意見であるのかについて、一つの考えを明らかにした。スペンサーはニュートン力学の「運動の第一法則」を引いて、「力」の表現であるとされる自身の哲学の原理の一つ：「運動の継続性」を見出している。しかし、スペンサーはニュートンのこの法則を誤解して使っている。この誤解の背景には、本来は区別して考えるべき「運動の第一法則」と「エネルギー保存則」とを区別せずに用いたことがあると考えられる(目的②)。これは、スペンサーを「全体それ自身の変化」についての考察から遠ざけてしまったと考えられる。ベルクソンは、「全体として変化する」視点によって「持続」を生み出した。それは「時間」「因果性」「力」を各々複数化することによって明らかにされるものである(目的③)。認識論を生命論と同時に論じた「総合哲学」というスペンサーの思想的試みをベルクソンは引き継いでいると思われる。スペンサーを乗り越えつつ継承することが彼の進化論に独自性を与えている(目的①)。

研究の方法 本研究では、研究経過や結果を公表し意見を交換する方法と、研究を遂行する為の資料を収集する方法をとった。公表し意見を交換する方法としては、①国際的な哲学コロクである、5^e colloque international du P.B.J.(2012 年 10 月、東京、京都)と、The Collegium Phaenomenologicum (2013 年 7 月、イタリア)に参加するとともに、各々の若手セミナーで発表し、国内外の研究者と意見を交換した。②専門家(A. フランソワ氏(フランス・トゥルーズ第二大学)のもとを訪れ、研究の意義・妥当性を含め意見交換を行った。③日本におけるベルクソンとスペンサーの関係について詳しい、杉山直樹氏(学習院大学・教授)、三宅岳史氏(香川大学・准教授)と意見を交換した。また、永野拓也氏(熊本高専・准教授)、伊東俊彦氏(相模女子大学・講師)村山達也氏(東北大学・准教授)に意見を仰いだ。

資料収集は以下のように行った。①スペンサーについての資料と、スペンサーと関係の深いダービー哲学会についての資料が保存されている、イギリス・ダービーの図書館(Derby Local Studies Library)を利用した。そこではダービー哲学会が所有していた図書についての情報も得た。②ベルクソンに関する資料の収集については、フランスの国立図書館(Bibliothèque nationale de France)を利用した。また、A.フランソ

ワ氏と面会した際にも資料をいただいた。

【結論・考察】（４００字程度）

本研究で明らかになったのは、スペンサーは力学の諸観念について十分に考察したとは言い難く、その上「運動の第一法則」についても誤解しているということである。スペンサーは「運動の第一法則」と「エネルギー保存則」を区別していない。ここには科学史的背景があるにしても、区別を曖昧にしたままスペンサーは自らの哲学の原理を立ててしまった。それによって時間認識を命題や表象に一元化することになり、時間認識を複数化する材料をベルクソンに提供することになったと思われる。ベルクソンは計測可能な時間とは別に、わたしたちによって「生きられる」時間を示した。そこでは、原因から結果へと説明されるはたらきとは別の、結果から原因へと辿ることによって説明されるはたらきが、「因果性」として区別されて示されている。

本研究ではベルクソンによるスペンサーからの消極的受容について明らかにしたが、積極的受容については、それがあると指摘するに留まり、十分に探求することができたとはいえない。この、言わば、ベルクソンにおけるスペンサーからの「継承的側面」については引き続き研究課題とし、より完全な比較研究として完成させたい。